

地方史と古文書学

宝月圭吾

「古文書」と言う言葉は、最近一般化して参りました。新聞、報章の面におきましても、盛んに使われるようになって参りましたことは、古文書等に關係している者としては、大変結構なことであります。しかし、「古文書学」ということになりますと、やはり正確に知られない面もあると思いますので、大変講義めいて恐縮ですが、古文書とはどう言うことなのか、古文書学とはどんな学問なのかと言うことから話を進めて参りたいと思います。

古文書と言う言葉は大変古くから使われていますが、これはかなりない内容を持っている言葉であります。殊に最近、新聞や報章などでは、正確に使われて居らず、単に古い史料ならばすべてこれを古文書と称していることが多いようです。しかし古文書と申しますのは、過去において書かれた手紙と言うようなもので、つまり、甲から乙へ書いたものを渡し、それによって甲の意志を伝えるようなものが、その基本的な性格であります。要は古文書とは、発行する者があって、受け取る者がなければならぬと言うことが第一の要件になるわけです。こ

う申しますと、窮屈に考えられますが、これはもっと広く考へて宜しいのであります。何えは、正世におきまして、宿場の高札場に立てられる高札のようなもの、具体的にいうと、藩の御触が板に書きつけられ、宿場の一番中心にある高札場という特定の所に掲示されます。こゝう言つたものも更には藩が一般の人達に法令の意思を伝達するものと言う点で、やはり古文書と言つてよいと思います。ですから古文書と言うものは、意思が特定の者から他の者へ伝えられる点に重きをおき、範圍をもう少し広げて考へてもよいことにもなるわけです。そう言うふうに広がつて参りますと、古文書と言うものが歴史の研究に大事なものであると言う立場から、史料——歴史を考へる材料——は全て古文書の名で呼ばれるようになってしまふ。其處に正確に言う古文書の領域を越えたものまで含める結果になつてしまふわけあります。これが現在多く——その直の研究者は別として——普通の常識では史料のことを古文書と呼ぶようになって来た原因の一つと思ふのです。

それは宅毛函として、正しい意味の古文書を対象として研究する字向が即ち古文書学と言うことになるわけです。

此処でちよつと御断りして置きますが、古文書と言いますと、古いと言う字がついていいますので、過去においてその効力を持ったものということは勿論ですが、何時から前かが当然問題となります。終戦後すもない頃、文部省がある機関をつくり古文書の取り扱ひをする企画がありました。これが即ち、現在の文部省史料館の基礎となつたと記憶しています。文部省の施設でありますから、法律をつくる必要があります。この法律の中に古文書という表現をつかわなければならぬ。そこで古文書の古とは一体何を表わすかと言うことが問題になりました。私共、古文書に關係している連中が文部省に集り、古文書の古の年代的下限について相談したことがありました。その結果、大勢のおもむくところ、大體明治二十年代、つまり町村制の施行の頃ぐらいを常識的に適当だということになり、それ以前のもものを古文書と呼ぶのではないかと意見が一致したと覚えております。

さて、それでは、我が国では國云において、どのように古文書を研究してきたか、またその研究が一つの字向としていかにして成立して来たか、と言うことを考えてみたいと思ひます。このことは、すでに古文書学の概説書などに書かれてありますので、詳しいことはその方に

譲りますが、大體、江戸時代後期を境にして、それ以前は眞の意味で古文書は字向研究の対象になるよりは、むしろ裁判の時の証拠書類、あるいは鑑賞の対象として取りあつかわれていました。とは申しますものの、幕府が主体となつた『本朝通鑑』の編纂などには、古文書を中心とする史料の収集が全国的に行なわれまして、その結果集まつた多数の古文書を使って、大きな歴史の編纂が行なわれました。こゝではある意味では古文書が、歴史の研究の史料として字向的な究明を経たと言つていいと思います。或は幕府の事業に対して、諸藩、例へば、水戸藩では、御承知のように『大日本史』の編纂が行なわれて居りました。藩の学者である佐々宗淳等が中心になつて、全国的な史料収集を行ない、その結果、『南行遊録』のような古文書が揃まれています。そういうわけで、この段階では、古文書研究が歴史の研究手段として使われる萌芽は出て来ておりますが、しかしまだ古文書そのものを更に深く掘りさけて研究すると言うことは、まだ一般化していません。つまり、古文書の研究に打込んだ幾人かの江戸時代末の考証学者が出て来なければ、眞の意味の古文書学の芽は出て来ないと私は考えます。例へば、穂井田忠友とか、或は狩谷振斎、又は伴信友と言うようないわゆる中国の考証学の影響を濃厚に受けた俊れた学者達が、古文書についての深い研究に入つて来ました。この段階になりますと、古文書学としての自覚と

方法との確立が行われました。例えば、穂井田忠友などは、幕末に正倉院へ行きまして、膨大な奈良時代の古文書の整理と研究に没頭して居ります。或は、狩谷探齋なども、古文書の研究によって得られた知識を、彼の非常に優れた考証に十分利用していることを見ましても、探齋も当時の立派な古文書学者であると思うのであります。こう言うふうに、古文書の研究の歴史はかなり長いのですが、古文書等として取り上げるとすれば、江戸末期にその端緒を求めなければならぬと思われれます。

ところが明治になりますと、古文書等は大きく発展します。これは実は、現在の史料編纂所の前身である「修史館」とか「修史局」と言われた国家機関の設立と決して無縁ではありません。具体的にいうと、史料編纂所と今は申していますが、明治維新政府が出来た直後の明治三年、維新政府は過去の歴史を振り返って、国の正史を編纂すると言う意図のもとに、新しい機関をつくり、その統裁に三条実臣を据えました。この役所はその後修史館或は修史局と変遷して、明治二十一年、当時の東京大学に移管され、それから、東大の中で、編纂や研究が行なわれるようになりました。これが今の史料編纂所のものであります。

その当時、明治政府が外国の学問・技術を導入する建て前から、外国の優れた学者を招聘し、各所の教育機関に派遣して、日本の学問研究、文化を高める努力をします。

した。その時、歴史学者として来たのは、ルードウィヒ・リースと言うドイツの学者です。この人が東大に来て残した功績はいくつもありますが、その中の一つに、当時既にヨーロッパで発達していた古文書学の方法を我が国に紹介したということがあります。当時の修史局には、先程申した江戸時代末に発達した中国風の古文書学が根をおろしていましたが、そこへヨーロッパ風の古文書学が入ってきて、修史局を中心として、新しい古文書学が興りました。

明治二十年代になると、当時修史局の中心であった豊野安釋博士などが全国に旦って、古文書を中心とする史料の収集に着手しはじめました。この当時の先生方は、三箇月位も収集の旅に出て、殆ど家に帰らないと言う状態のようでした。その結果、期待に背かず大量の古文書が発見され、今まで信じられていた史実が、その時、その時でどん／＼訂正され、また新しく書き加えられる興味から、殆ど寝食を忘れて仕事に没頭されたと言われています。このような努力の積み重ねで、当時の史料編纂所は、明治二十年代に、古文書を中心とする史料収集が大幅に進み、それを対象として新しい古文書学が次々に形成されて行きました。そして明治二十六年、東京大学文科大学において、初めて古文書学の講義が聴かれたのであります。このような古文書学の研究の成果によりまして、翌二十七年、国家の歴史の基礎になる史料の出版

がはじめて行なわれて居ります。つまり、大日本史料と大日本古文書の才一冊がそれぞれ世に出たわけです。

このように史料の編纂を土台にして育つて来た古文書学を兼大成した学者が出て参りました。これが、即ち、黒坂勝美博士です。黒坂先生は、史料編纂所におきまして、古文書部の部長として、長年大日本古文書の編纂を主宰され、古文書に対する深い経験と、先生独特の鋭い勘を活用し、併せてヨーロッパ古文書学の体系を取り入れられて、わが国の古文書の様式を論じた『古文書様式論』と言う立派な仕事を完成し、それによつて学位を得られました。日本の正史学界において、古文書学の専門家として、しかも古文書学の研究で学位を得た最初の人であります。その意味で黒坂先生は、わが国の古文書学の始祖であると考えられているのであります。そしてその後の日本の古文書学者、例えば、相田二郎、伊本勇一、吉村茂樹、中村直勝などの諸先生は、直接に、或は間接に黒坂先生の教えを受けて、古文書学を発展させたのであります。つまり、黒坂古文書学と言うものが、現在の古文書学の中心をなしているのであります。このように古文書学は、黒坂先生の力で、学問として確立し、正史学の研究の上での補助学科として、今や各大学におきまして、殆どどこでも古文書学の講義が行なわれています。先程申しましたように、古文書学の発達は一面、史料編纂所に通うところがきわめて大であり、従つて古文書

学は、史料編纂所の性格を非常に深山持つている。このことは、古文書学にいい影響を与えてると同時に、又逆にある致命的な欠陥を与える結果になっています。何故かと申しますと、史料編纂所の仕事は、國家の命令によつて、國の正史を作るのであると言ふことが建て前になつてゐるわけで、この性格は今でも変つていません。しかし、いずれに致しましても、日本の正史は長いわけで、大体、現在までの史料編纂所の仕事の対象としている時代は、主として古代、中世なのです。従つて現在までに採訪した史料は、三、四十万点もありましたようか。しかし、その大部分は、古代・中世のものだけで、近世のもの収集は、殆ど未着手の状態です。こうした内容の史料編纂所の史料を母胎として発産してきた古文書学は、当然その対象は古代・中世に限られ、近世以降の文書は殆ど研究の対象からはずれています。古文書の概説書として最も優れた相田二郎先生の「日本の古文書」を見ましても、あつかわれてゐる文書は、奈良時代から戦国時代までのものだけで、江戸時代以後の古文書についてはほとんど触れるところがありません。これは相田先生がどう言うよりも、相田先生が受け継がれて来た古文書学の性格がさうであり、その性格は、史料編纂所の性格であると言つてさしつかえのないのです。

もう一つ大事なことは、相田先生の扱われているのは、古代・中世の文書でも、いわゆる公文書と言ふものの、

まり、朝廷・幕府・戦国諸侯とかから発行されたものが主体であつて、百姓同志が取り替わしたような私的文書については極めて僅かのページしか書いていない。我々が現史に方々の文書を調べてみると、無論公式文書も少くないが、それにもまして多いのは、百姓の質入れ証文とか、売り渡し証文とか、或は寄附の証文のようなものが多いのです。従来の古文書学ではこのような文書は極めて僅かの位置しか与えられていないところが大きな欠陥だと思ふのです。これは、黒板先生が組織された古文書学の形式と言う問題、つまり、この種の命令書はこう言う形式によつて作られるのだと言う一つのルールがあるわけで、そのルールを明らかにすると言うところに、研究の主たるテーマがあつたために、古文書の様式論とか、形式論が主題となつたわけです。農民の書いた文書は形式を逸脱し、形式がないわけではありませんが、形式の持つ意味が非常に希薄であると言うところから、いきおい、従来の古文書学では、このような私文書は取り上げられにくかつたわけです。現在から見ますと、この点も大きな欠陥ではないだろうかと思ひます。そこで、今まで申した欠陥の中で、特に現在の時点で重要なものは、何と申しまして、近世近代の古文書を従来の古文書学が取り扱つて来なかつたし、また今までの研究の枠の中では取り扱ひにくいことです。従つて、この際、これをどう発展させて行くかが、古文書学に關係する者だけで

はなく、歴史研究者全体に与えられた大きな課題になつてゐるわけです。そこで、戦後における近世・近代文書の研究の状況について考へて見たいと思ひます。

戦後における私共歴史学、特に古文書に關心を抱いてゐる者にとつて、最も遺憾に堪へないのは、古文書の亡失の問題であります。無論古文書は、時間とともに滅びつゝあることは、止むを得ないのですけれども、終戦直後の亡失は、實に恐るべき状態でした。これにつぎましては、いろいろな原因が考へられますが、一つの向題として、歴史に対する信頼感が戦後不当に失われたことです。戦後何か、今までの歴史はみんな虚偽だと言うふうな考へから、それまで我が家の歴史を語るものとして、大事にして来た古文書を持主自身がどんどん紙屑屋に売つたとか、風呂の焚つけにしたような事態が少くありません。そのほかに、農地改革の問題があります。それによつて、長い間文書を持伝えてきた旧家がかなり多く没落し、文書も家と運命を共にしたものもあります。その後のもう一つの向題は、町村合併です。これを機会に各村では、その当座必要なものは残しましたが、明治以来の古い書類は邪魔だとばかり、すべて廃棄した例も稀ではありません。しかし、こう言つた幾度かの危機を乗り越えて、今面、地方では文書は派山残つております。いまこれに關連して念頭に浮びますのは、最近、新聞などに載りました、何の士申戸籍のことです。明治四年の太政官布告

により、翌五年、即ち壬申の年に、全国的に戸籍が作られました。これがいわゆる壬申戸籍で、その後の戸籍の基本となりましたために、今でもかなり多くの市町村に残っています。この壬申戸籍は、我々が地方の調査をする際に非常に役立つもので、明治五年段階におけるその土地の家の状況、婚姻関係、その他、いろいろのことがわかるものです。これが現在重用される場合があるので、廃棄しろと言う要求が出て来ています。このような要求が出て来るのは、使い方が悪いのでありまして、これをすべて廃棄すると言うようなことは、そうでなくても少い明治期の史料にとつて、非常に大きな損失になるわけです。ですから、誤った使い方をされないような方法をも十分に講じた上での保存を、諸学会が連合して法務省その他の関係官庁に対して、意見書を出しています。

昭和二十一年一月、法隆寺の金堂の壁画が焼けました。これは大衆に不幸な事件でしたが、終戦後歴史に対する信頼を失っていた人々に歴史を再び考える大きな契機となりました。それに関連して近世文書の消滅を予防しなければ、という問題が歴史学者の間に急速に広がってきました。そればかりでなく、文部省あたりでも、これに關心をもちはじめました。こういう状況のもとで、昭和二十五年の秋になると近世庶民史料調査委員会と言うものが発足したのです。この会では慶応大学の野村兼太郎博士を中心に、古文書に關心をもつ学者達が集り、全国

的に、主として江戸時代の古文書の所在調査を行ない、どこにどう言う文書があるかと言うリストを作ったわけでありました。この作業は、各地の多数の研究者の助力を得て、四、五年続きました。その結果を地区に分けて、『近世庶民史料所在目録』と言う名で三冊にまとめて出版しました。その書物自体に集録されたものは極めて僅かですが、そのような企てが行なわれたこと、それが各地方の研究者の協力を得たこと、その必要を認識されたことなどの点で、戦後における近世文書の調査研究の伸展に対して、非常に大きな基礎の役割を果たしたと私は考えております。

これと並行しまして、昭和二十四年、文部省大学学術課が中心になつて、史料館をつくりました。地方において滅亡に瀕した文書は、出来るだけ保存方法を講じて貰うが、どうしても地元で確保困難なものは、国費でこれを買い上げ、この史料館で保存整理して公開するのが、その設置の目的です。しかし、予算が少ないうえに、活動の範囲は広くありませんが、今もなおその方向に向つて仕事を進めています。このようにして、戦後各地の古文書は、危機に見まわれ、又それに対応する研究、調査、保存の問題が不十分ながらも講ぜられ、そう言うものをを通じて、各地の歴史家の古文書に対する關心を一段と深め、それによる利用と研究が急速に高められてきたことは、何といつても、戦後の歴史学の発展の大きな側面と

いえると思います。

なお、ついでに申しますと、最近、近世・近代文書の利用につきまして、現在二つの問題が進行しております。その一つは、「文書館」の設立、もう一つは、古文書館の設置と云うことです。文書館の設立は、大体、現在中央官庁を中心に見まして、そこに眠っている莫大量の官庁文書の保存と利用を目的とするものです。これに対して、学術会議あたりでも積極的に応援し、現在自治庁が中心に存りまして、実現の段階に入っております。これが完成して直正に運営されるならば、近代史の研究に非常に役に立つようになると思います。

次に古文書館の問題ですが、近世古文書を主体とし、これを地方ごとに施設を集めて、そこで保存し、研究者の利用に供することを目的とするものです。これは、幾つかの案が出まして、なかなか実現の運びに至りませんでしたが、最近になりまして、どうやら成案が出来るようであるようです。かような地方的な古文書館が各地に出来てきますと、各地方の古文書館との連繋を連繋を基礎として、各地に土地に即した着実な研究が展開される可能性が出て来ると考えられます。私共は、一日も早くそれがもつともよい形で発足し、十分な機能を果たすことを期しているのであります。

こう言った中央の動きに対応して、地方においても、特に戦後においては、地方史に対する、すこぶる活発な

研究が起っています。その原因はいろいろありますが、その一つは新しい学制により、各地に国立大学が設立され、そこに極めて優れた学者が多くおり、そう言う学者たちがその土地にある古文書、とりわけ近世文書の採訪や研究に献身するばかりではなしに、むしろ大事なことでは、正しい歴史学の研究方法をその地方に浸透させて行つたことです。これが非常に地方史研究の登壇に大きな役割を果たしたと常に通感しております。

そこで思い起すのは、地方史研究協議会の発足当時のことです。地方史と言う言葉は、勿論以前からありましたが、戦前においては、専ら郷土史と言う言葉が使われて来ました。この言葉のもつニュアンスは、どうかすると、お国自慢に墮し、地域的な限定のもとに行なわれる狭い視野の研究と言う感じがつきまとうていたのは事実でした。戦後に存りましてから、前にも述べましたような理由で、各地で新しい学問を身につけた新しい歴史研究者が多く生れ、しかもその土地の歴史の研究に打ち込んだ人達が輩出してきました。一方戦後の歴史学、特に社会経済の発展により、中央にいる歴史家が、地方の歴史、例えば荘園の個別研究に乗り出すような状況が一般化してきました。こうして中央在住の学者と地方在住の学者が堅い連繋のもとで仕事をしていく態勢が、どうしても必要となつたのです。また地方在住の歴史家がその土地の歴史事実の究明をしていくと、必ず隣の村、隣の

県では、この問題はどうか行っていたのかという疑問に達する。そこで研究を伸ばすためには、どうしても隣村、隣県の学者との知識の交換なしでは、何も考えられないことに気がついてくる。このようにして地方の研究者は、中央の学者との交わらず、一層地方同志の結び付きが必要となってくるわけですが、こうなってくると、地方史の研究は、あらゆる歴史研究の基礎を培うものであり、地方史の任務は、きわめて重きを加えてくるのです。かような現段階では、地方史は、且つての郷土史にとどまっていることは許されません。また地方史として、現実にあることが許されるかどうかとも判らない「中央史」の前に小さく写っている必要はないのです。このことが、戦後、地方史協議会が創立に参画したわれ／＼の心意にあったのです。つまり中央在住の歴史学者と地方在住の歴史学者、また地方と地方同志の密接な学向的なコミュニケーションの確立が、達成目標だったわけですが、協議会の機関誌である「地方史研究」が、果して現在その目標に達した仕事としているかどうかは、いろいろと問題があるかと思いますが、しかし特に地方在住の皆様のお援助によって、その目的を果したいと考えています。

また地方でも、各県単位の歴史家の横のつながりが出来上り、またそれを足場として、さらに数県を結ぶ研究団体の活動がはじまりつつある状況です。当青森県でも、非常にしっかりした研究団体が存在し、長い伝統の上に

立ち、戦後ますます活動を盛んにしておられること、御同様に堪えさせん。わたしは青森県にまいったのは、これがはじめてですが、兼ねて『青森県沿革史』という書物を拝見しています。著作はかなり古いのですが、その内容は、きわめてしっかりしたものだと思います。それは編年体という記述方式と相俟って、事実の叙述がきわめて客観的であるからです。

最近わが国では、いたる処で県・市・町・村史の編纂が、めざましい勢で進行しています。戦後二十年を経過し、ようやく物心両面の安定をみるに至ったことが、その原因だとすれば、この地方史編纂の盛況はまさに慶賀すべき現象でしょう。しかし、その内容をみると、粗製濫造が多くありません。特に記念事業としての編纂の場合、時間的制約が強く、十分な基礎的な調査を行わず、いっ加減で書いてしまうものが多い。また中には流行の歴史観を拝借して、安易なものに書くという傾向もみられます。地方の歴史の編纂は、その地方の宝物であるばかりでなく、歴史の学界の共通の財産です。その意味で一番大切なことは、現実の史料・古文書に即した客観的な叙述です。わたしは、『青森県沿革史』に感心し、いまだに恩恵を受けている原因も、実はこの点にあるわけですが、

わたしは、先程、わが国における古文書学の隆盛の経過と現状についてお話いたしました。そして現在の

古文書学の欠陥、換言すれば、これらの発展を必要とする方面の一つとして、近世以後の古文書学の欠如という点を挙げました。古文書学という学問は、史実の真の意味を究明するためには、いわば、その働きをするものです。その意味で、近世文書との真剣な取組みが、各地で行われることが、もっとも望ましいと思ふのです。それが正しい地方史研究の心礎となり、同時に新しい近世古文書学の設立の要ともなると確信しています。戦前の古文書

は、東大史料館纂所を舞台として、黒坂先生という偉大な学者によって組み立てられたものです。しかし戦後の新しい古文書は、各地におられる多数の地方史研究者の、古文書との着実な対決の綜合によって、はじめて確定されるべきであると信じて疑いません。

何にかとりとめのない話を申上げました。長時間の御静聴を感謝いたします。